



観光や交流の中心 マリンゲート塩釜

誰でも楽しめめる施設に

塩釜市の旅客ターミナル「マリンゲート塩釜」は1996年にオープンしました。塩釜二小のこども記者、船蔵悠佑さん(11)と只野彩花さん(10)、本山桜祐さん(10)の3人が、運営する塩釜港開発株式会社取材しました。

(1面に関連記事)



平塚さん(奥左)と鈴木さん(奥右)から震災当時の話を聞く3人。右の建物がマリンゲート塩釜

総務課の平塚信行さん(46)と鈴木啓太さん(45)が迎えてくれました。只野さんが特徴を尋ねると、鈴木さんは「浦戸諸島を往復する市営汽船と松島湾を遊覧する観光船の発着所がメイン。飲食店や土産店を併設した観光施設でもあります」と教えてくれました。

建物は船がモチーフで、甲板をイメージしたウッドデッキや丸い窓、帆や波を表すオブジェなどがあります。

船蔵さんは来場者の推移を質問。平塚さんは「東日本大震災時を除き、2015年まではほぼ年間100万人を超えていましたが、新型コロナウイルスの影響もあり、昨年は63万人にとどまりました」と話しました。

震災では、津波が2・7メートルの防潮堤を越えて押し寄せ、1階が浸水しました。「館内にいた2、300人を2階以上に避難させ、食料を飲食店から提供してもらい、1週間ほどのぎました」と平塚さん。3人は当時の写真を食い入るように見ながら耳を傾けました。

塩釜の特産、マグロの解体ショーなど、イベントを毎月開き、観光客だけでなく地元住民も訪れる施設を目指しているそう。鈴木さんは「インバウンド(訪日客)も含め、若男女誰でも楽しめるようにしたい」と力を込めました。

取材を終えて

イベントPRしたい

船蔵 悠佑さん



震災前に、浦霞の酵母を長野県に預けていなかったら、販売を再開できなかったかもしれないそうです。事前の備えが大事だと思いました。マリンゲート塩釜のイベントは、自分もポスターを作るなどしてPRしていきたいです。

酒造り続けてほしい

只野 彩花さん



浦霞の歴史を知ることができました。震災で被災したけれど営業を再開し、今もきれいな蔵が残っています。ずっと酒造り続けてほしいです。マリンゲートでは誰でも楽しめる施設を目指しています。取材の仕方を学べて良かったです。

震災時の発想すごい

本山 桜祐さん



マリンゲート塩釜は、東日本大震災で1階が水没し、飲食店から食料を提供してもらったそうです。発想がすごいと思いました。佐浦も酒のタンクが壊れるなどの被害がありました。知らなかったことを教えてもらい、勉強になりました。